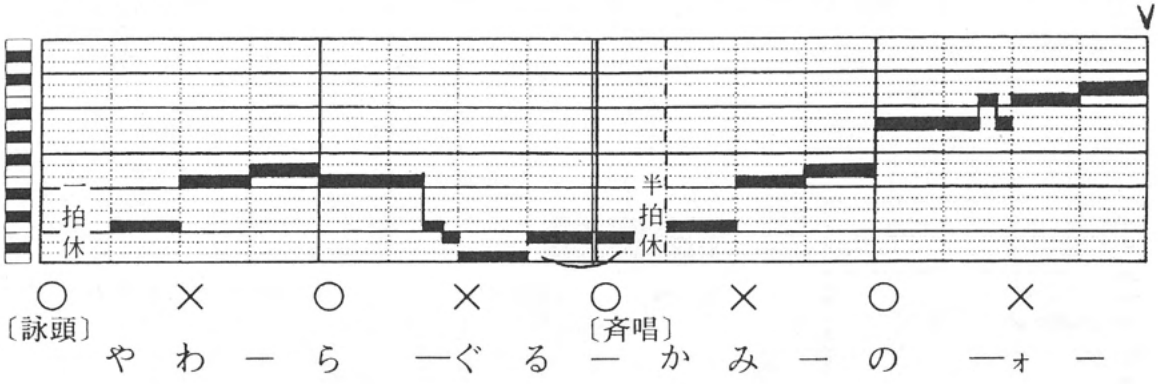
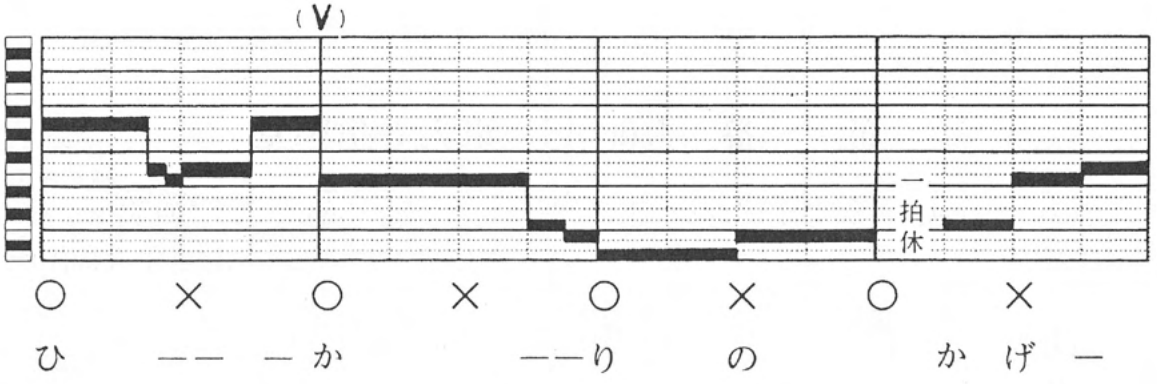
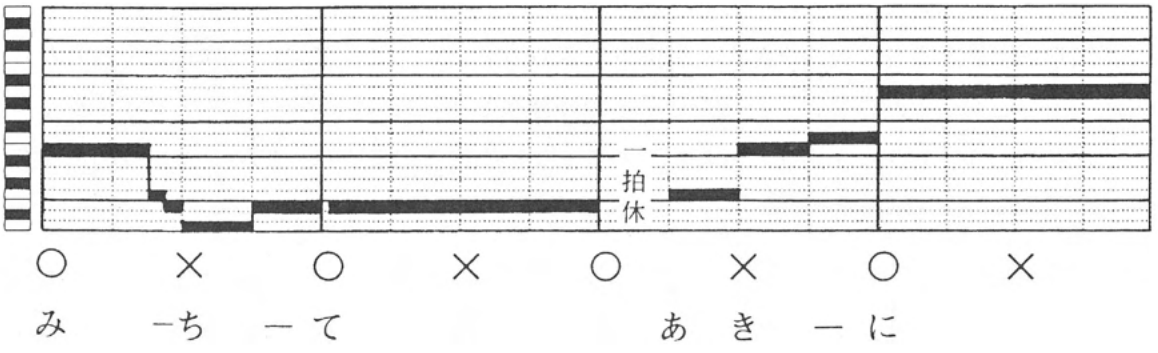
第十二番　欣浄寺の御詠歌（神影調）

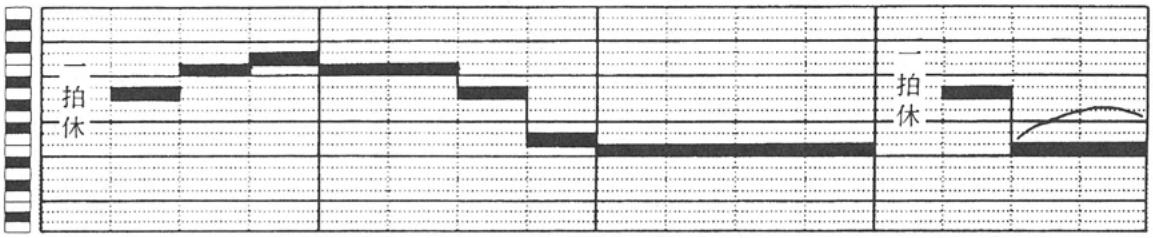
速く唱える

松　濤　　基 作曲



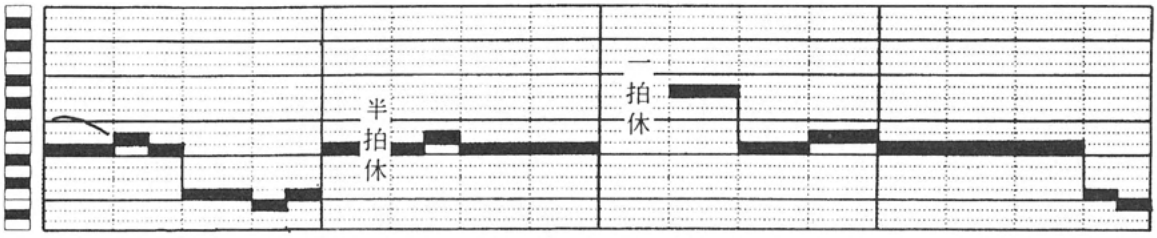






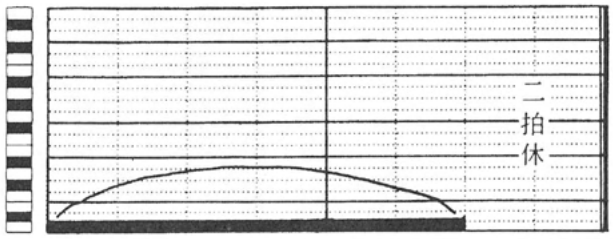
○ × ○ × ○ × ○ ×

か わ ― ら ― ― ぬ み ―



○ × ⊗ ⊗ ⊗ × ○ ×

― じ―― ――か よ― の ― つ ― ― ― ――



○ × ×

き ― ―

ポイント注意

- 一拍目休止符で、二拍目からの立ち上がりと四拍目はソフトに。

（歌詞と解説は32ページ）

第十二番　伊勢の国　欣浄寺

和らぐる　神の光の　影みちて　秋にかはらぬ　短か夜の月
(法然上人御作)

承安５年（1175)、法然上人が43歳で浄土宗を開かれた時、伊勢神宮に参籠して念仏弘通をお祈りになりました。その時、日輪が現われてその中に六字の名号が光を放ちましたので、念仏が神慮に叶ったものだと受け止められ、その証として、自ら感見された相を写し取って外宮に納められました。これが「日輪の名号」と呼ばれております。その後外宮が兵火に会い、日輪の名号は焔の中から舞い上がって笹の葉にかかり光を放ったと言われ、笹の葉名号と尊称されるようになりました。

大意　阿弥陀さまはじめ、仏・菩薩のお慈悲は何としても人々を救いたいと、煩悩の塵の世に身を変えて現れ、神の姿となって私たちを守り導き、お念仏を勧めておられます。今、その神の御威光が満ち満ちています。夏の夜ではありますが、月は秋のようにこうこうと照り輝き、その月の光の中で、神の御威光、すなわち阿弥陀さまのお慈悲の光を身と心でいただき、夜の更けるのも忘れて一生懸命お念仏を申し続けました。